道外からの入学者の中には、家族が遠別町にふるさと納税を行い、遠別農業高校の返礼品を受け取ったことがきっかけとなって東京から入学したという方もいました。その後、ふるさと納税と遠別農業高校をかけ合わせた取組は農業高校が中心となることで、様々なことにチャレンジし、活気あふれる高校へと進化しています。

ヤフー人材育成プログラム

北海道とヤフー株式会社は、地域活性化を目指して締結した包括連携協定に基づいて、遠別農業高校で2018年から「デジタル人材育成プログラム」に取り組んでいます。生徒たちは町の魅力を調査し、マーケティングの基礎を学んだ後、実際に販売する商品を決めていきます。その後、商品の魅力的な写真の撮影方法、クリックされやすい広告のコツなどを学び、数班に分かれて販売を実施します。

期間限定でヤフーの通販サイトに店舗ページを開設し、生徒たちが作った、もち米やラム肉の加工品、町特産の農産物や水産品の販売を行い、その後、校内で成果発表を行うことでノウハウを積み重ねています。

▶ 授業風景（上）と商品写真撮影（下）

「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」準グランプリを受賞

「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」は、2014年から行われている国の表彰事業で、農山漁村が有するポテンシャルを引き出すことにより地域の活性化、所得向上に取り組んでいる優良事例を選定し、全国に発信するものです。

2019年は全国931件の中から優良事例として「コミュニティ」「ビジネス」「個人」の各部門をあわせて31地区、5個人を選定しましたが、北海道内からは遠別農業高校を含む3地区が選定され、コミュニティ部門では遠別農業高校だけが選定されました。12月3日、首相官邸で選定証授与式が行われ、遠別農業高校は見事にコミュニティ部門準グランプリに選出されました。

▲ 遠別農業高校生徒・教諭が安倍総理大臣と記念撮影

遠別農業高校は、生徒がサフォーク羊の飼育から加工・販売まで一貫して行う、加工品をふるさと納税の返礼品に使用するといった取組のほか、校内の「遠農高マルシェ」で町内外の方に加工品の販売を行うなど、地域に密着した取組を行っています。また、2019年7月には、食の安全や環境保全に取り組む農場を認定する「ASIAGAP（アジア版農業生産工程管理）」を、米、かぼちゃ、たまねぎなど11品目で取得し、さらに、担い手の育成と地域農業の発展に向け、町や農業者、農協などの関係機関と「遠別農業高校農業教育推進連携協議会」を設立するなど、地域に親しまれる活動が評価されての受賞になりました。かつて、存続の危機に直面した遠別農業高校が、国の表彰を受けるようになるとは、当時夢にも思わなかったそうです。

▲ 学校敷地内の直売所「遠農高マルシェ」

これからの遠別農業高校

学校では現在も、遠別町の特産品であるミズダコを原料に使った世界初のソーセージを開発したり、道立高校では初となるキャッシュレス決済を導入したりするなど、新たな試みに取り組んでいます。

また、「遠別農業高校アグリスクール」として、町内の幼児、小学生、中学生との農業体験を通じての交流事業も引き続き積極的に展開しています。

遠別町ではこれからも「町・高校・地域」が一体となって、活気あふれるまちづくりに向け、農業高校と連携を深めていきます。

▶ 羊の飼育実習での一コマ

本記事の取組は、遠別町役場経済課商工観光係で担当しております。
お問い合わせ先 TEL：01632-7-2146　E-mail：shoko@town.embetsu.lg.jp

『なおみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～

そらぷちキッズキャンプ

わかの 若野ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｨﾚｸﾀｰ

ささき 佐々木事務局長

みやさか 宮坂ﾒﾃﾞｨｶﾙﾏﾈｰｼﾞｬｰ

～なおみちカフェ～

鈴木知事が地域訪問する機会に、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝伝えします。

令和元年12月13日訪問

そらぷちキッズキャンプ編

今回、御紹介するのは、難病の子どもやその家族を受け入れることができる、日本初の医療ケア付き自然体験型キャンプ場であり、アジア（中東を除く）初のシリアスファン※公認キャンプ場でもある滝川市の「そらぷちキッズキャンプ」です。

日本には小児がんなどの難病と闘っている子ども達が約20万人いると言われていますが、国内には難病の子どもやその家族を受け入れることができる医療ケア付きの自然体験型キャンプ場がなく、子ども達は自然体験をする機会がないまま闘病生活を送ってきました。

そらぷちキッズキャンプは、平成16年に有志により任意団体として創設され、これまで様々な事業やプログラムを展開し、病気の子ども達やその家族が自然の中でくつろぎ、笑顔で楽しく過ごせる時間と場所を提供しています。

訪問した時、利用者はいませんでしたが、子ども達がキャンプをして過ごす映像を拝見し、施設に勤務する方から子ども達を受け入れた時の様々なエピソードを伺いました。

また、新たに完成した療養馬用の馬房など、施設内外を見学させていただきました。

通年営業しているこの施設は、これまで１０００名以上の方が利用され、運営は会員収入や寄付、そして多くのボランティアスタッフにより支えられており、キャンプに参加する方の費用は交通費も含め全て無料とのことです。

佐々木事務局長からは、難病と闘う子ども達とその家族にとっては、旅行にも様々な困難が伴う中で、ここに来れば、スタッフがお手伝いしながら、家族で一緒に同じ時間を過ごすことができること、例えば入浴に際しても、障がいのあるお子さんが安心して利用できる施設であることなどをお聞きし、そらぷちキッズならではのたくさんのケアと工夫がこのキャンプ場の中に詰まっていることが感じられました。

また、空知の大自然を記憶に残してもらえるように宿泊棟の部屋の窓が通常より大きくしてあるというお話も、とても印象的でした。

※ 正式名称は、シリアスファン・チルドレンズネットワーク。ハリウッド俳優の故ポール・ニューマン氏が米国に設立した難病の子どもとその家族のための医療ケア付きキャンプの世界的ネットワーク。

（当日の知事の言葉から）

これからも、みんなの「そらぷちキッズキャンプ」が継続して活動できるように我々も何が出来るか考えながら、そらぷちの活動を発信していきたい。

佐々木事務局長などからそらぷちキッズキャンプの概要などを説明していただきました。

道の駅「なないろ・ななえ」

なおみちカフェの動画などを
掲載のホームページはこちらから

令和2年2月18日訪問

道の駅「なないろ・ななえ」編

次に御紹介するのは、平成30年3月の開業からわずか1年10ヶ月間で利用者が200万人を突破した道の駅「なないろ・ななえ」です。

道の駅「なないろ・ななえ」は、秀峰駒ヶ岳や大沼等、美しい国定公園を有する七飯町にあり、高い天井が印象的な建物の中には、同町や函館市近郊で収穫された新鮮野菜、地元特産品等を置く直売所のほか、地域交流スペースや子ども達が遊べるキッズスペースなどもあります。

また、交通量が多い国道5号線沿線に位置することもあり、利用者数が目標の年間90万人を大幅に上回るなど、道内外の観光客が利用する、道内でも有数の人気の道の駅となっています。

今回、知事がお話を伺ったのは、七飯町の宮田副町長と「なないろ・ななえ」の施設を管理・運営している七飯町振興公社の山川代表理事です。七飯町が西洋りんご発祥の地であることや、昨年その栽培を始めてから150年を迎えたこと、全国のりんご生産者が町に集まり交流が深められたことなど、りんごにまつわる町の歴史も知ることができました。

道の駅には、七飯町の食材を楽しむことのできるカフェもあります。この日は、ここでしか味わえない名物「ガラナ味のソフトクリーム」と、一番人気の3種類のりんごジュースが飲める「ききりんごジュース」を美味しく試食・試飲させていただきました。

この「なないろ・ななえ」ができたことで、七飯町で生産された農作物はもちろん、老舗のパンやお団子などの土産物まで1ヶ所で購入できるようになり、地域の方にとっても使いやすい場所になっているようです。

入口には道南の様々な地域の観光パンフレットも並べられており、短い時間、立ち寄られた方々にも、道南の魅力が発信できるよう工夫されていました。

山川代表理事から店内の物産品等の説明をしていただきました。

地域交流スペースで宮田副町長から「なないろ・ななえ」について説明をしていただきました。

（当日の知事の言葉から）

今年は東京オリンピック・パラリンピックなどのイベントにより、これまで以上に多くの観光客の皆さまが来訪されると予想されます。

この機会を活用し、七飯町を訪れる皆さまに地域の魅力をアピールすることで、地域がより一層活性化されることを期待します。

創る
令和2年3月発行
発行：北海道総合政策部地域創生局地域戦略課　電話：011-204-5089　内線：21-180

北海道創生ジャーナル「創る」編集部紹介

「まちを創る」、「ひとを創る」、「しごとを創る」という地方創生の理念とともに、その先にある「北海道創生」の実現に向け、道内各地で奮闘されている皆様にこの情報誌を役立てていただくべく、今年度4回(第11号～14号)の発行に携わった若手職員11名を紹介します。

守屋　佳貴
（遠別町から派遣）
第11号～14号「企画・編集主担当」
各地の現地取材で、自分の目で観て初めて知れるものが、北海道にはまだまだ沢山あると実感しました！

加藤　卓
第12号「豊浦町」
地元に近く、慣れ親しんだ町でしたが、沢山の発見がありました。秘境「小幌駅」は必見です！

浅田　克将
（秩父別町から派遣）
第14号「秩父別町」
オホーツク方面の取材の時に北見市で食べた焼肉は今までの人生で食べた焼肉の中でも1,2を争う美味しさでした。今度はぜひ「厳寒焼肉まつり」に参加したいです。

横浜　賢
第11号～14号「企画・編集副担当」
道内の様々な地方創生の取組を勉強させていただきました。また、現場の方の熱い想いを伺わせていただき、貴重な経験となりました。

中村　真也
（新ひだか町から派遣）
第12号「新ひだか町」
地元のことを記事にするのはとても新鮮で、新たな視点でまちを捉えることができ、ますます新ひだか町が好きになりました。

中出　章太
第14号「津別町」
普段はデスクワークに追われ、目標を見失いそうになってしまいそうですが、取材を通して地方創生の現場で頑張られている皆様の活力を感じ、自分も負けていられないという気持ちになりました。

宇野　陽助
（苫前町から派遣）
第13号「安平町」
現地に出向き、その取組に携わった方々から伺った沢山の「物語」は貴重な財産です。

工藤　綾子
（青森県から派遣）
第12号「恵庭市」
地元の皆様とお話しさせていただく機会を与えていただき感謝しています！

荻原　嵩幸
第13号「留萌市」
留萌商工会議所様から地域に対する熱い想いを伺うことができ、身が引き締まる思いがしました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

阿部　拓
第14号「編集部紹介」
11人のメンバーの中で唯一私だけ取材に行けませんでした(泣)
来年度は是非現場に行って地域のチカラを感じたいです！

原　友輝
第14号「編集部紹介」
取材に行かせていただいた秩父別町の「キッズスクエアちっくる」は暖かくなったら子供を連れて、ぜひ訪れたくなる施設でした！

「創る」バックナンバーは、ほっかいどう応援団会議ポータルサイトへ

ほっかいどう応援団会議　検索

ＵＲＬ： https://hkd-ouendankaigi.jp